

解答

一

問一

うっとりとして、ただおよくことだけを楽しんでいるときの気持ちをあらわしたものを。

問二

すべて平仮名書でつづけ書にすることにより、水と一つにとけあった一体感が生み出され、身も心も託してやすらぐ様子が透明感を持って表現されている。

問三

水に身をゆだねているといっても、けっして水に流されているのではない。状況の中に意思をもっているということ。

問四

しずかに、ゆったりと泳ぐ人物を表現しているという現実を踏まえ、からだの水とけあい、たましいは水、自然と一つとなり、天地にとけこむことを表現しているところが現実をこえている。

問五

① 異論 ② 省略

二

問一

① 貧困 ② 勤勉 ③ 神秘

問二

母の死を教える為に隼人が探した本に書かれた方法で、直也が母と話せたということに驚き、話せるはずがないのに自分も話したいと思い、頭の中の整理がつかず、混乱する気持ち。

問三

隼人は母の死を説明することに気をとられ、死を理解し、受け止めたつもりでいても、直也の言葉により母と話せるのではないかと、気持ちが揺れ動くことがあった。しかし、直也に母の死を信じると言われ、母は死に、二度と会ったり、話したりできないという現実直面することで、耐えられない程哀しくなった。

解説

一

問一

本文中盤に、高田敏子さんは「およくひと」の詩から〈へきもち〉を想像し、その気持ちに同化し、共感し、そのことを説明しているという記述があります。「三行目からは、」で始まる段落をみると、およく人の心の状態が書かれているので、気持ちを表している箇所を適切にまとめ説明します。

問三

傍線3、4の前後で主体性が表れている部分をまとめて書きあらわします。主体性とは自分の意志・判断で行動しようとする態度のことです。

二

問二

傍線1の前後にある隼人の描写に着目します。直也が「ママと話せたよ」という話を、嘘だと思いつつも、もしかしたら話せるかもしれないと思っている様子を説明します。

問三

隼人は、母の死を受け入れられない直也に、死を認識させることを必死に考え、頭を悩ませています。そのような中で、直也から「死を信じる」という言葉を聞き、初めて母の死が現実のものとして感じられ、重苦しく辛い哀しみに襲われている様子をまとめます。